

絶対みなくなる前夜

みなくなるの人

これはとある女の子のなんてことのないおはなし
わたくしとくるみさんが
わたくしとくるみさんが、ただしあわせになるための
ただ、そのためのおはなし

*

わたくし、花鳥蘭子と申します。東西南北（仮）の元メンバー。そして、今ここでタブレットを触っているのが大河くるみさん。くるみさんですわ。同じく東西南北（仮）の元メンバー。

わたくしとくるみさんは現在同じ家で暮らしていますわ。深い理由がある訳ではないですの…ただ、くるみさんの心が揺れ動いた。心が揺れ動いたから。それだけですの。くるみさんの心を護る、護る為にわたくしの家にいる。

あの日、くるみさんの心は揺れ動いた。

あの日、外は雪が混じる氷雨がちらついていたのを覚えていますわ。学校指定の外套だけでは寒いので、一枚セーターを着込んでいました。

東さんや美嘉さんといつものように車窓に揺れる。その日は収録が早い時間からでしたので、始発でしたわ。同じ城州駅で乗り込んで。三人とも軽く顔を合わせたのです、合わせたのですが。

お互い「おはよう」の一言もありませんでしたわ。社交辞令としての挨拶すら交わされないので当時の東西南北（仮）でしたわ。今じゃ考えられせんわね、けど信じてください。これがあの冬のわたくし達でしたの。冬の城州駅のホームくらい。冷え切っていましたの。

あの日、くるみさんの心は揺れ動きましたわ。

東西南北（仮）の存在が、私とくるみさん。そして、美嘉さんと東さんを繋ぎ止めていましたの。けれど、くるみさんの心が揺れ動いた事でその糸は引きちぎれてしまいましたの。悲しかったですわ。それが今、ここにある世界ですわ。

くるみさんは私の家にいますわ。昨日も一昨日もその前の日も、ずっと一緒にいますわ。

「おうちには帰らなくていいの？」「いい…」

このやり取りだけでくるみさんは、我が家にいる。

違います！追い出すつもりはありません。ただ、くるみさんのことが心配で。

わたくしは大いに結構ですわ。24時間、常にお友達が傍にいて素敵な事だと思いませんか？

わたくしはとても素敵な事だと思えますわ。けれど、くるみさんの表情は曇っています。

「南さん」くるみさんがわたくしの名前を呼びますわ

「どうしましたして？」

「おうち帰りたくない、くるみはずっとここにいいの？」

「もちろんですとも、わたくしとくるみさんはずっといいしよ、いっしょですよ？」

「邪魔だと思ってる？」

「そんなことありませんわ…お父様もお母様も『蘭子にお友達ができてうれしい』っておっしゃってくれましたわ」

——それからですわね。わたくしとくるみさんのプライベートルームが共有化されたのは。

ささやかな衣装類。とノートパソコンだけを握りしめて、くるみさんは我が家に住んでいますわ。

医療保険も携帯電話料金も華鳥家持ちという事になっていますわ。戸籍だけはどうしようにもありませんね。

問題はない、問題はないですわ。しいて言えば。くるみさんが華鳥邸の門の外から出ない事がかりですわ。

この広い広い華鳥邸だけが、くるみさんの世界。高い塀と重厚な門構えでおおわれた。くるみさんの世界。

以上が現在のわたくしとくるみさんのあらましですわ。私達は同棲！そう同棲していますの！くるみさんと二人

静かな生活をしていますわ。学校？知りませんわね？行っていないわ！くるみさんの側にいる方が大切ですから！

*

あの冬から幾月、お外の気温は25度を迎え、葉桜が青々しく夏の匂いをまとわせる新緑の季節。だけど、わたくし達には関係ありませんわ。

あれからずっと、くるみさんはわたくしの家から出ようともしませんでした。くるみさんの心が揺れ動いたまま。

何かに怯えてるように眠るか、一緒にテレビを見る、時々パソコンに向かっていますわ。

夜中、「いやだ！東ちゃんもういやあ！アイドルなんていやあ！」って叫びながら飛び起きる事がありますわ、あの日の出来事が相当心に楔を打ち込んだようですわね。悪い意味で。

くるみさんが泣き叫ぶ夜を幾度となく過ごしましたわ。けどわたくしにはくるみさんを抱きしめてあげることしかできない…

「南さん、いつもありがとう」

他人行儀に、くるみさんは私にねぎらいの言葉を下さりますわ。その言葉にわたくしは思うのです。二人の間には何か隔たりのような物が存在しているようでモヤモヤしますわ。

テレビには東さんの姿が映りますわ。そう東さんが出るからこの番組を見えています。

東さんはアイドルになってしまった。夢を叶えるって本当に素敵な事ですわ。

「ほら見て！くるみさん！東さんよ」

東さんはあのままアイドルへの道を駆け足で登りきってしまっていましたわ。今はトーク番組のひな壇で存在感をアピールしていますわ。大食いにもチャレンジされていますわ。

「あずまちゃん…あずまちゃん…」

「そうね、東さんねくるみさん。東さんが頑張っている姿を見ていると、なんだかうれしくなりますわね」

「…ごめんね…ごめんね…」

涙が溢れ、滴り落ちていく。か細い声で謝り続ける。くるみさんの声は悲痛としかいいようがありませんでしたわ。「ごめんね！あずまちゃんごめんね！！！！いっしょにいられなくてごめんね！！！！」

くるみさんはそのままボロボロと泣き始めましたわ。どしゃぶりの雨のように涙が止まらない。

そう、もしわたくしたちがそばにいてあげたら、東さんの傍にいてあげられさえすれば。東さんは一人になる事はなかった。あの時、東西南北（仮）を繋ぎ止めていたら…東さんは――

この自責の念はわたくしとくるみさん共通の罪ですわ。

「そうね、ごめんなさい東さん…ごめんなさい東さん…」わたくしとくるみさんは。ただ泣くことしかできない。

『悲しい』という事を、ただ共有することしかできません。華鳥邸の閉め切った窓から少し早い梅雨の香りがする。

そんな夜でしたわ。

菖蒲の季節がやってきた、きましたわ、わたくしとくるみさんはあい変わらず。

くるみさんから涙の数が減ったように見えますわ。それと同時にわたくしに甘える機会が増えましたわ。

甘えを象徴する出来事がこの間ありましたわ。ある日、ふとした瞬間にくるみさんが抱きついてきた。それを拒む事はわたくしにはできませんでした。くるみさんは抱きついて、わたくしの首筋を嗅ぎながら「南さんの匂いを嗅ぐとき、落ち着くの」そうとだけおっしゃられましたわ。

わたくしも悪い気はいたしませんでしたわ。むしろ善（よ）き兆しに感じました。くるみさんがやつとわたくしに体…いや心を許してくれた。そんな気がしてなりませんでしたわ。

わたくしの心と身体は、ただ多幸感に満ちていた。

日々が続いた、ある日。今日もくるみさんはわたくしの腕の中。

「ねえくるみさん」

「どうしたの南さん」

どうしてもひっかかる所がわたくしには存在いたしましたわ。

「くるみさん…わたくしね、何か思う所があるの」

「どうしたの南さん」

くるみさんは聞き返す。

『南さん』ってちよつと他人行儀じゃありません？」

「そんな事ないよ！南さんは南さんだよ」

くるみさんがわたくしの身体から一瞬離れる。そして掴み返す。華鳥邸リビングのカーテンは締め切ったまま陽の光を一つも通さない、鉄壁の帳。

「南さん』って所に距離を感じますわ。わたくしたち、同い年なのですよ？」

「南さんだつてわたしには『くるみさん』じゃん」

「わたくしは基本、尊敬できる人間には全て『さん』をつけていますわ。くるみさん、けど」

「けど…？」

「わたくしはくるみさんにとって、きつと尊敬にあたる人間ではありませんわ…だから『さん』はつけないで欲しいの」

「そんなことないよ南さん、南さんは立派な人。今もこうしてくるみを支えてくれる」

くるみさんのが動く。わたくしの身体を掴む力がギュッと強まるのを感じましたわ。

「ごめんね…ごめんね…ごめんなさい…ごめんなさい…」

…いけないですわ！このままだとくるみさんがまた泣き出してしまいますわ！違う！違いますのくるみさん！

「ちがいますの！そういう意味じゃありませんの…覚えています？くるみさんの『ニッシー』」

「うん、覚えてる。誰も呼んでくれなかったけど」

「それと同じよ、わたくしも親しみを込めて呼んでもらいたいの…蘭子…南…呼び捨てでもいいわ」

「じゃあみ…『みなみさん』…『みなみ』…」

「みなみい…」

——みなみい。

神聖な響きだけが、そこに存在した。

わたくしはそう思わざるおえなかった。

『みなみい』そう、『みなみい』でいいわ、くるみさん…」

「うん…よろしくね、『みなみい』」

双（ふた）り、掌を交わす。

ここにどんな言葉を飾り立てても、きつと嘘になる。今、此处に存在するくるみさんとわたくしの存在だけが、真実なのであると。わたくしは思うしかありません。ありませんわ。

——これは、わたくしとくるみさんのはじめりのものがたり。